

第3章 庄・蔵本遺跡一帯の調査研究成果

端野 晋平

はじめに

徳島大学蔵本キャンパスとその一帯で調査された遺跡群は、日本列島における水稲農耕開始期の代表的な集落跡の一つに数えられ、その成果は日本考古学界に大きく貢献してきた。本稿では、これまでの調査成果を振り返り、徳島平野における弥生時代の始まり、庄・蔵本集落の初期弥生社会について議論する。

1. 庄・蔵本遺跡一帯の調査成果

庄・蔵本遺跡は、吉野川の支流である鮎喰川の下流域で、眉山の北側に位置する（図1-1）。現在、徳島大学では、蔵本キャンパスの範囲にある遺跡を、庄町・蔵本町という地名にちなんで「庄・蔵本遺跡」と呼んでいる。1982年から始まった、この遺跡の発掘調査は、初期は徳島県教育委員会が、途中からは徳島大学が担当し、これまで30次以上、実施された。その結果、縄文時代終末から近代にかけての幅広い時代の資料が多数発見され、とくに弥生時代前期（2500～2200年前）のそれは学界でも注目を集めている。

この時期の考古資料に関する調査成果は多岐にわたるが、あえて言えば、①弥生時代初期の集落の全体像が把握可能、②日本列島で最古級の畝跡の発見、③農耕活動の存在を証明する農地＋灌漑施設＋栽培植物＋道具のセットでの確認、④弥生人の生活誌を復元するための土器・石器・木器・金属器などの多様な遺物が数多く出土といった点に集約されようか。

図3-1は、弥生時代前期前葉～中葉^{註1)}に属する主要な遺構の分布を示したものである。キャンパスの南側では、居住域と墓域がいくつか確認されており、居住域の一つは二条の大溝に取り囲われている。南西部では旧河道が東西方向に走っており、そこから北側と東側へと伸びる用水路が確認されている。旧河道と用水路の付近では畑が、北東部では水田が確認されている。このように、居住域・墓域・農地のセットが一つの弥生前期遺跡で確認された例は、全国的にみてもまれである。

弥生時代前期中葉の水田は、用水路や井堰といった灌漑施設を伴うもので、1区画は長方形をなし、小さいもので長辺3m、大きいもので長辺8m程度を測る。最近の庄・蔵本遺跡第35次調査（トリアージスペース地点）でも確認された（図3-2）。弥生時代前期中葉の畑は、畝立てするものとしては列島最古級であり（中村2009、端野ほか2015）（図3-3）、最近では南蔵本遺跡（徳島県立中央病院ER棟地点）の調査でも確認されている（徳島県・徳島県埋文2021）。イネ・アワ・キビといった栽培植物の炭化種実（佐々木・バンドリ2015、那須2017）、木製の鋤・鋤、打製石斧、磨製・打製石庖丁など、当時の農耕の実態に迫るための貴重な資料も出土している（図3-4）。そのほか、イノシシなどの動物骨、木製の弓、石鏃などの狩猟活動を示す遺物、土器に付着した球根類の炭化物（米田・佐々木2017）なども確認されており、灌漑水田農耕を基軸としつつも、多様な食料獲得戦略がうかがえる。

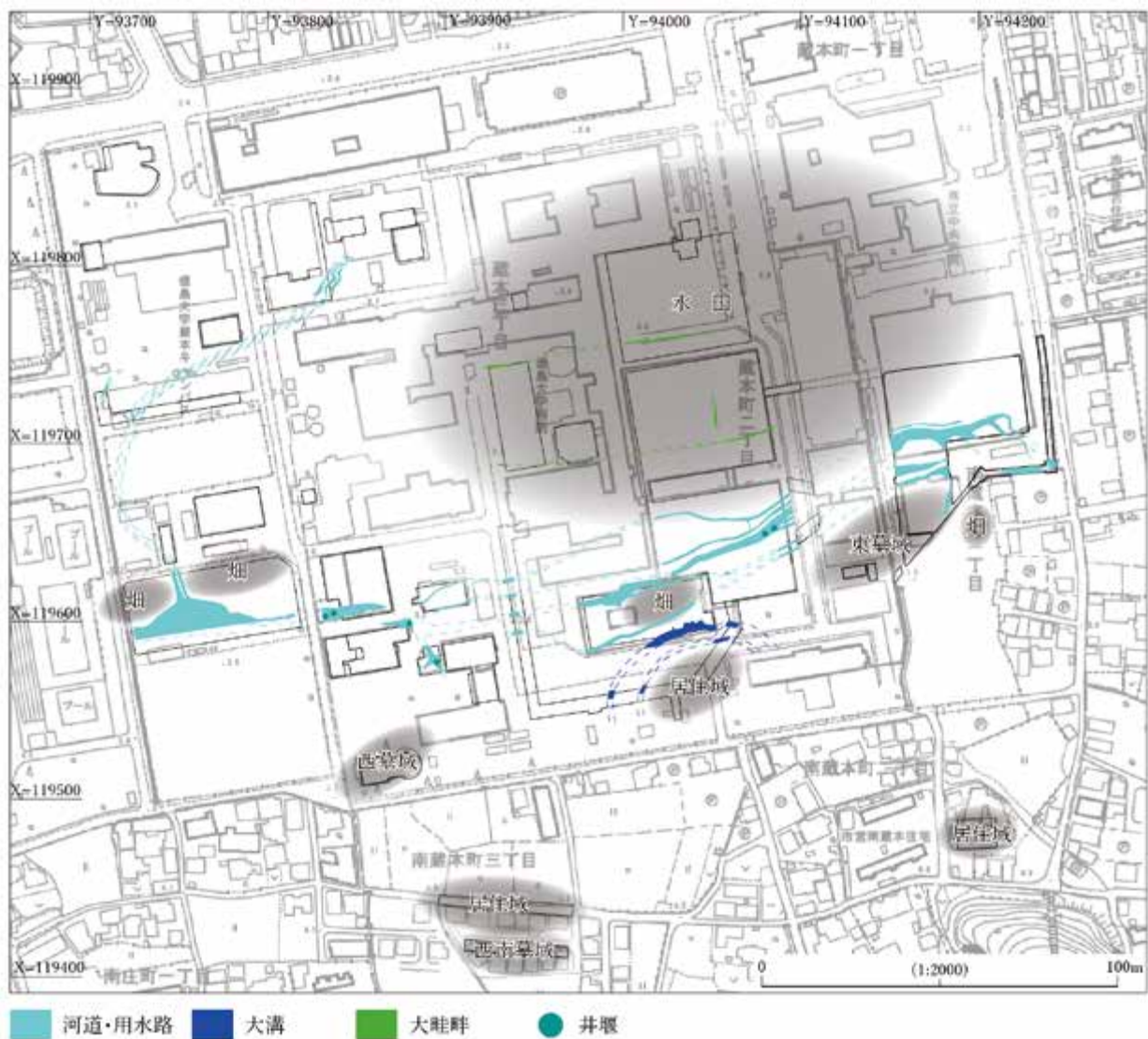


図 3-1 弥生時代前期前葉～中葉における庄・蔵本集落一帯の様相
端野 (2018a) より引用・改変。

2. 徳島平野における弥生時代の始まり

庄・蔵本遺跡の位置する鮎喰川流域では、弥生時代が始まる前から人びとが居住していたことがこれまでの発掘成果により明らかとなっている。以下、中村豊 (1998, 2002, 2018) の整理に従い、弥生時代が始まるまでの過程を描き出す。鮎喰川の左岸に位置する矢野遺跡では、縄文時代後期初頭の土器や土製仮面、石棒などが出土している。土製仮面については、朝鮮半島南部・九州西北部の貝製仮面が縄文時代中期までさかのぼるとみて、仮面の起源をこうした地域に求める説も提出されている (磯前 2008)。これが妥当であれば、矢野遺跡の土製仮面は西から伝わったこととなる。石棒は、主に東日本で盛んに用いられた文物であり、この存在は東日本を源流とする儀礼がこの地に伝わっていたことを示す。鮎喰川の右岸に位置する名東遺跡では、縄文時代晩期後葉の土器や石棒などが出土し、土器からはレプリカ法によりイネとアワの圧痕が検出された。この時期の農耕は畑作であった可能性が高く、縄文文化に伝統的な儀礼を継続しながら、生業は従来からの狩猟・漁労・採集に畑作が加わったものと考え

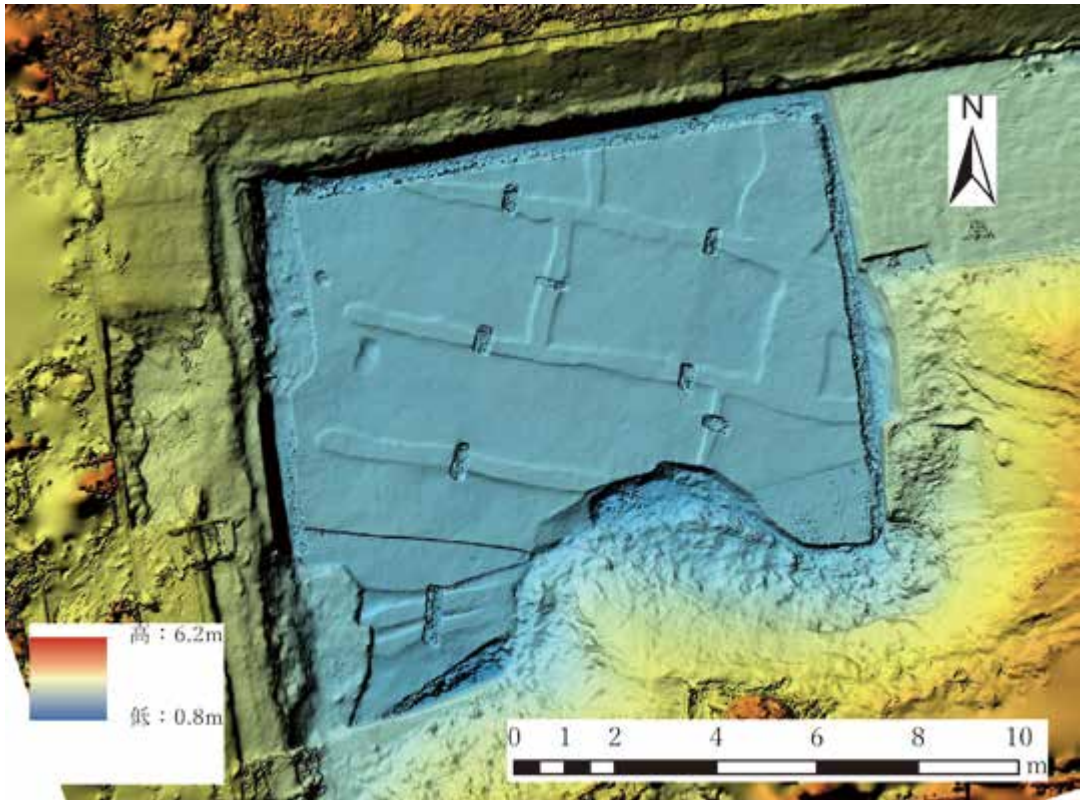


図3-2 庄・蔵本遺跡第35次調査地点の弥生時代前期水田跡 DEM

られる。庄・蔵本遺跡から東に800mほど離れた場所に位置する三谷遺跡では、最後の縄文土器と最初の弥生土器の共存が確認された。土器を時代区分の基準とするならば、この時期から弥生時代となるが、前時期から引き続き、石棒を使った縄文的儀礼を行いつつ、イネ・アワ・キビの栽培を畑作により行ったとみられる。また、同時期に存在した庄・蔵本集落との間で交流があったとみる意見（中村1998・2002）も提出されている。そして、弥生時代前期中葉になると、庄・蔵本集落では、灌漑施設を伴う水田とともに、列状墓域、石棺墓などの石を用いた墓、弧状大溝、大陸系磨製石器などの弥生的要素が優勢となる。このように、縄文時代から弥生時代への文化の変化は、生業の変化とともに、段階的に起こったと考えられる（図3-5）。

ところで、弥生文化は徳島平野で発生したわけではなく、外部からもたらされたものであり、そのルーツは北部九州に求められる。弥生文化

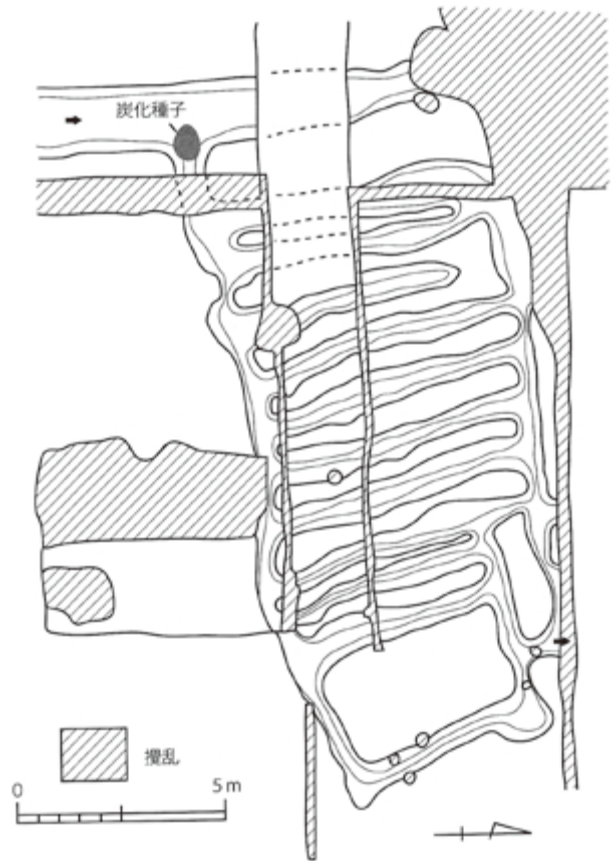
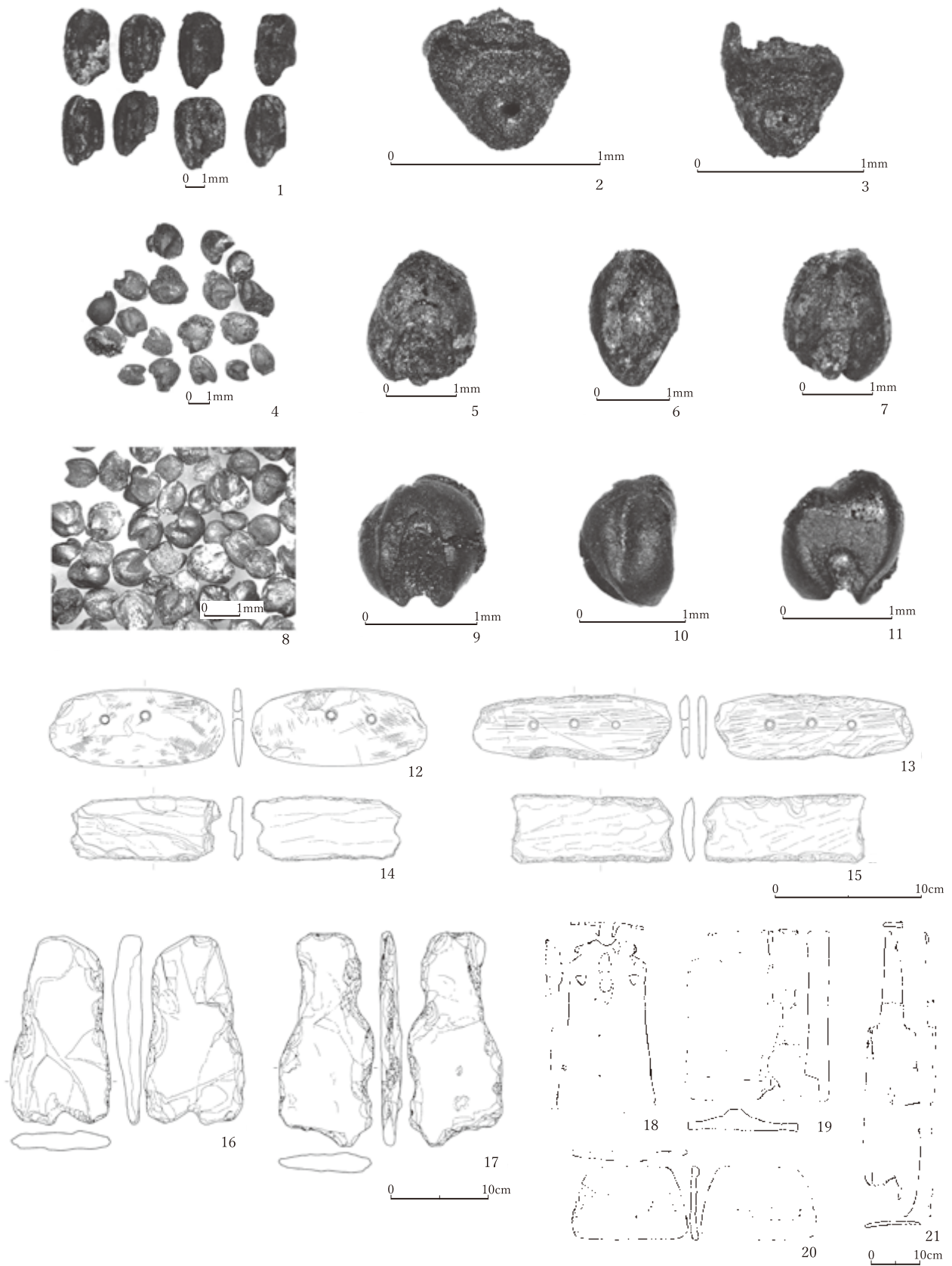


図3-3 庄・蔵本遺跡第20次調査地点の弥生時代前期畑跡
中村（2011）より引用。



1～3：イネ炭化種実 4～7：キビ炭化種実 8～11：アワ炭化種実 12・13：磨製石庖丁 14・15：打製石庖丁 16・17：打製石斧 18～21：木製農具（18：広鋤 19：広鋤未成品 20：泥除未成品 21：曲柄平鋤）

図3-4 庄・蔵本遺跡出土炭化種実と農具

1～11 は那須（2017），12～17 は端野ほか（2015），18～21 は三阪（2017）より引用・改変。

時期	遺跡			弧状大溝	灌漑水路	水田	畑	列状墓域	石棺墓等	石棒祭祀	土器		石器		木製農具	栽培植物			縄文・弥生的要素	無文・弥生的要素	
	名東	三谷	庄・蔵本								縄文	弥生	縄文系	大陸系		イネ	アワ	キビ			
縄文晩期後葉	○									■	■										
弥生前期前葉(古)		○	○							■	■										
弥生前期前葉(新)		○	○							■	■										
弥生前期中葉			○																		

図3-5 鮎喰川流域における遺跡と縄文・弥生移行期の文化要素の変遷
中村(2002・2018)を参考に作成。

の成立と広がりをお語る良い資料として、弥生土器がある。北部九州で成立した最古の弥生土器、板付I式土器は灌漑水田とともに、西日本各地へと広がり、各地の弥生土器の母体と考えられる(田中1986ほか)。徳島平野もそうした地域の一つであり、板付I式土器と類似度の極めて高い土器が出土している(図3-6)。こうした弥生土器や灌漑水田農耕とともに、他の文化要素も伝わったと考えられる。

墓制はその中の一つで、筆者がこれまで研究対象としてきたので、詳しくみる。庄・蔵本集落の弥生前期前葉～中葉に出現する列状墓域、石棺墓・配石墓(木棺墓)・土器棺墓といった多様な墓、土器・石鏃・管玉の副葬習俗の系譜はどこに求められようか(図3-7・3-8)。これについては、これまで多くの意見が提出されてきた(河野1998, 北條1998, 中村1998, 橋本2001, 近藤2002)。結論から言うと、遠くは朝鮮半島南部の無文土器文化に求められる。ただし、「求められる」とは言っても、直接、徳島平野に伝わったというわけではなく、「北部九州を介して」である(図3-9)。半島南部の灌漑水田とそれと不可分な関係にある文化は、縄文時代晩期後葉に北部九州に伝わった。このときに導入された文化の一つが支石墓などの葬送習俗である。北部九州での導入当初から大きく改変を受けた葬送習俗は、弥生時代前期前葉になるとさらに変化し、墓壇内に石を伴わず、木棺だけを設置した例が多くを占める

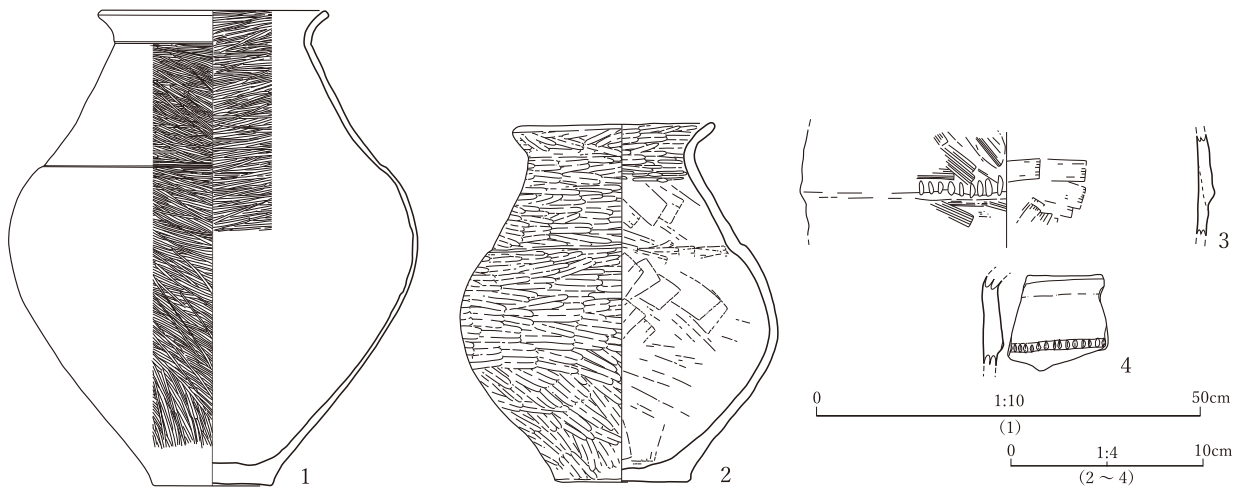


図3-6 庄・蔵本遺跡一帯最古の弥生土器

1. 南蔵本住宅 SI02 2. 庄・蔵本1998年度立会排水管 SK02 3. 庄・蔵本10次溝 1 4. 庄・蔵本22次 SK02

1は勝浦(1999), 3は北條編(1998)よりトレース・改変。

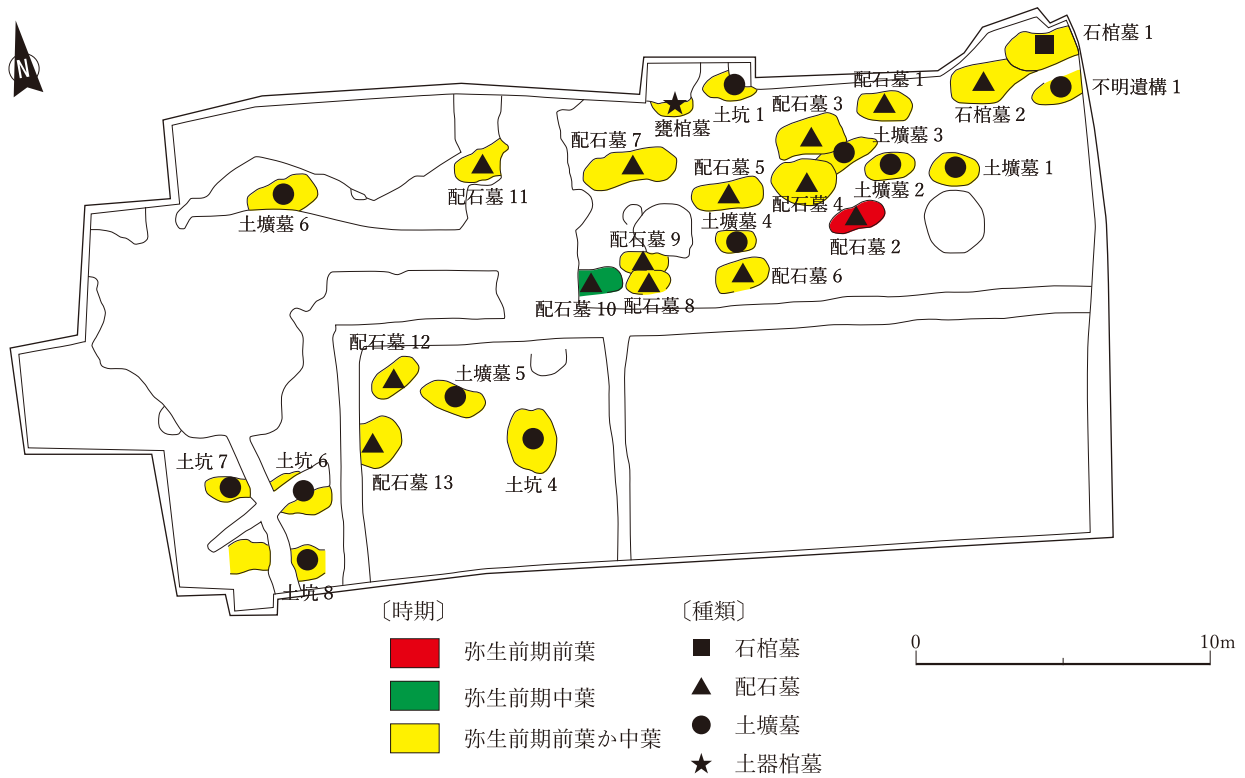


図 3-7 庄・蔵本遺跡第 6 次調査地点の墓域
北條編 (1998) をもとに作成。

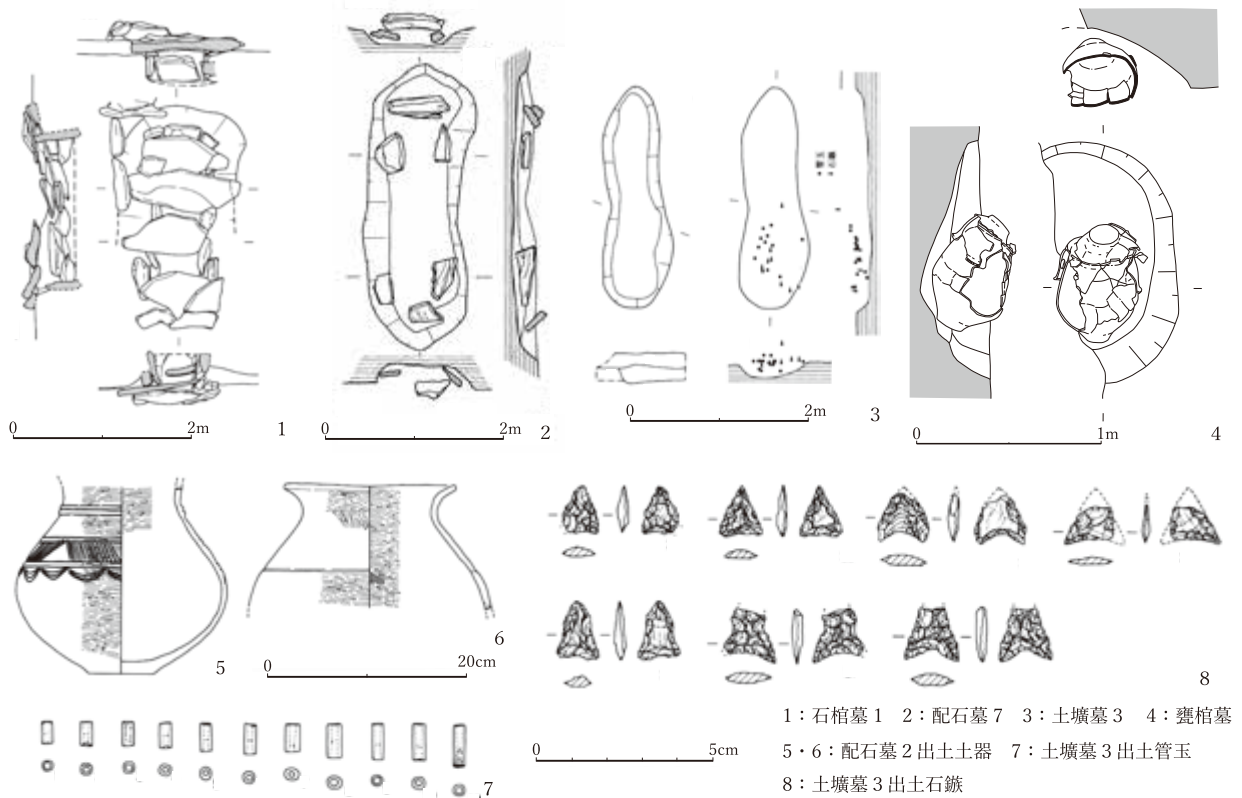
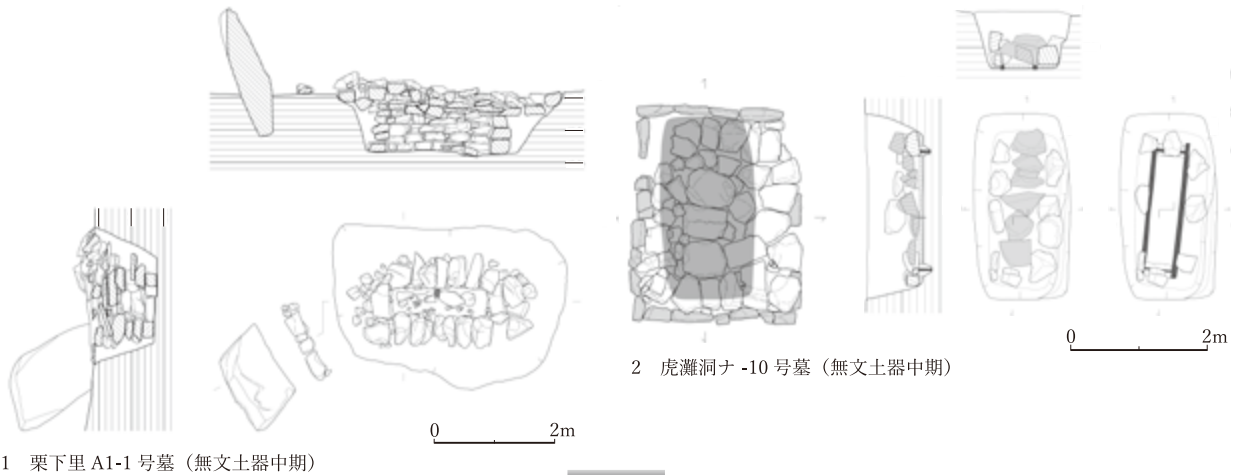


図 3-8 庄・蔵本遺跡第 6 次調査地点の墓と出土遺物
北條編 (1998) をもとに作成。

朝鮮半島南部



日本列島 (北部九州)

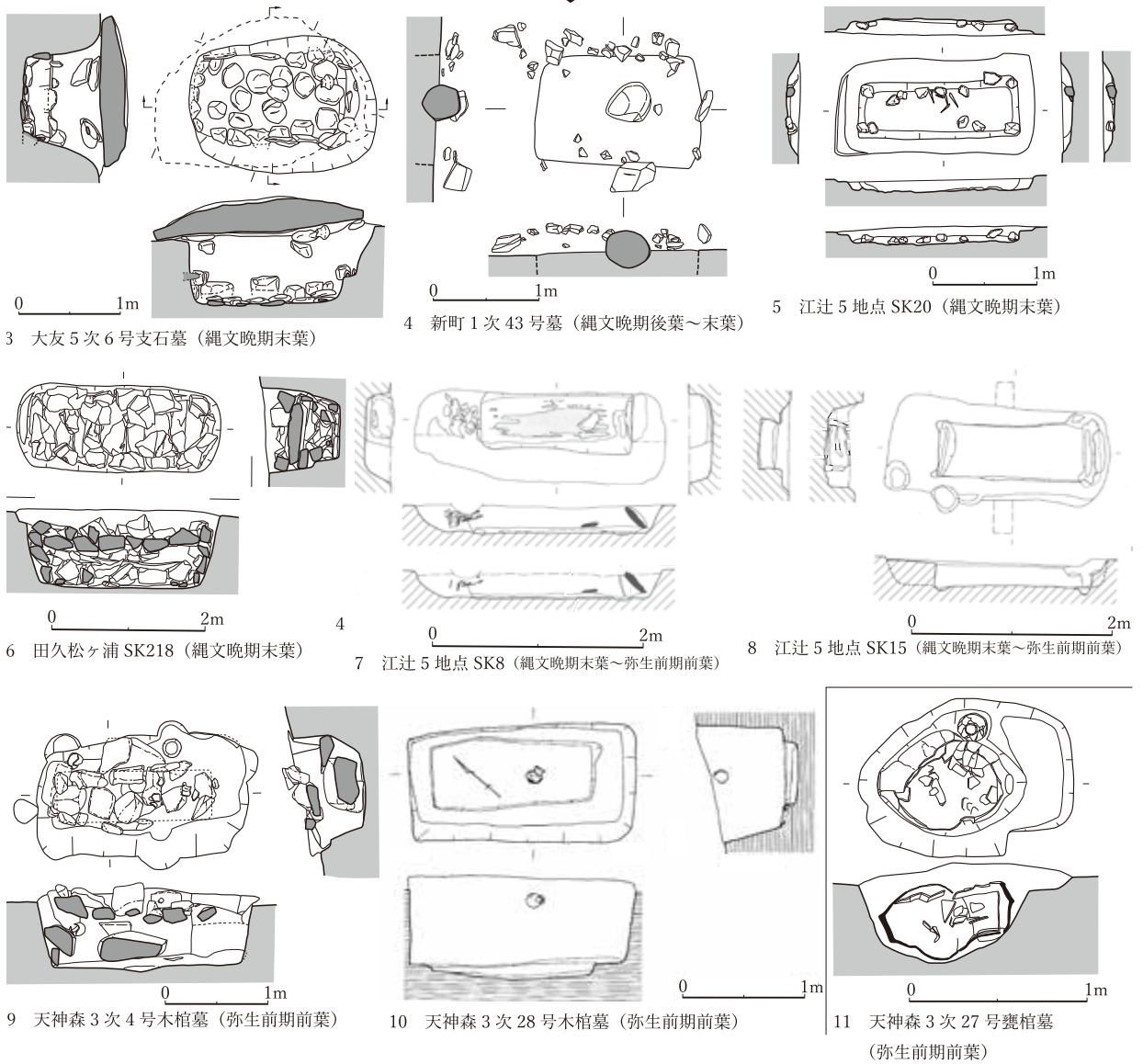


図 3-9 朝鮮半島南部の支石墓と北部九州の墓制

1は慶南発展 (2009), 2は東亜細亜 (2012), 3は宮本編 (2001), 4は橋口編 (1987), 5・7・8は新宅編 (2002), 6は原編 (1999), 9～11は松村編 (1996) より引用・改変。



図3-10 集落と出自集団
キージング (1982) をもとに作成。

ようになる (端野 2018b)。こうした木棺墓に配石墓・石槨墓を加えた多様な墓制、一部改変を受けた副葬習俗が、土器棺墓とともに、徳島平野へと伝播したと考えられる。庄・蔵本遺跡一帯の弥生時代前期前葉～中葉の墓域には、こうした弥生的要素のほかに、縄文時代以来の土壙墓も混在する。こうした受容のあり方は、他の文化要素の受容のあり方と調和的である。そのいっぽうで、北部九州との間での葬送習俗、土器の類似度の高さに目を向けると、受容の背後に、そこからの少数の移住者を想定してもよいかもしれない。

3. 墓地からみた初期弥生社会

考古学で社会を復元するための方法の一つに、墓あるいは墓地を用いたものがある。庄・蔵本集落の弥生前期社会については、以前から北條芳隆により、第6次調査 (青藍会館地点) の検討結果をもとに見解が示されていた。北條は、墓の種類分布の偏りから、複数の造墓単位 (単位集団) の存在を想定した。そして、管玉の副葬状態、使用・補修痕、数量に関する検討結果にもとづき、装飾品一式を起点とした管玉の分有関係が一つの集団墓の中でとり結ばれたものとみて、副葬量の違いに階層差を見出した (北條 1998)。

その後、筆者は第6次調査地点以外で確認された墓域の調査成果を報告するなかで、弥生前期社会をどう理解しうのかを再検討した (端野 2018a)。現在、庄・蔵本遺跡一帯では、弥生時代前期前葉～中葉の墓域が三つ確認されている (図3-1)。これらを対象に、石を用いた施設、遺物の種類、墓壙の規模の相互の関係を検討した結果、石の使用頻度・置き方、遺物の種類には、身分差よりもむしろ年齢差が強調されたことがうかがえた。

考古学で過去の社会を論じるとき、世界的によく使われるモデルとして、アメリカ文化人類学者エルマン・サーヴィスの社会類型がある。これは、人類社会を社会統合の度合いによって、バンド社会・部族社会・首長制社会・国家の四つに類型化し、バンド社会から国家へと向かうにつれ、社会の成層化・複雑化が進み、かつ統合の度合いが高まるというものである (サーヴィス 1971)。庄・蔵本集落の初期弥生社会は、埋葬行為において階層差よりも年齢差が強調されていたこと、居住域・墓域・農地が示すように定住した農耕民の集落であることからみて、部族社会に位置づけられる。

つづいて、複数の墓域は何を表示しているのかを、文化人類学の知識を借りつつ考えてみた。墓域だけでなく、この時期に複数の居住域が同時存在したことが指摘されている (近藤 2017)。また、農地である畑も、南蔵本遺跡 (徳島県立中央病院 ER 棟地点) で確認された例 (徳島県・徳島県埋文 2021) を含め、3地点で確認されている。部族社会における一つの集落は、複数の異なる出自集団の分節からなると考えられる (図3-10) ^{註2)}。ここでの出自集団とは、氏族あるいはクランと呼ばれ、共通の祖先・系譜観念をもち、外婚の単位となるものである。一集落に、複数の出自集団の分節 (サブクランあるいはリネージ) が居住するというあり方は、異なる出自集団の分節間で婚姻関係を結ぶことを可能に

し（キージング 1975）、人の再生産には好都合である。個々の墓域・居住域・生産域は、こうした出自集団の分節を表示しているのではないか。

おわりに

以上、庄・蔵本遺跡一帯の調査研究成果をみてきた。本稿で紹介した内容は、数多くある成果のうちのごく一部であることをご了承いただきたい。大学の再開発を背景に、遺跡の多くが姿を消すこととなった。しかし、そのおかげで考古学研究も大きく前進したことも事実である。庄・蔵本遺跡の発掘調査で蓄積した資料は、考古学の各分野に貢献する可能性を大いに秘めたものであり、その自負をもって今後も研究に取り組んでいきたい。

註

1. 本稿での徳島平野での時期区分は中村豊（2000, 2002）に従う。
2. 日本考古学界で、こうした概念を全面に出して、列島先史社会を論じ始めたのは、田中良之（1998, 2000）である。本稿はこうした業績に倣うものである。

文献

〔日本語文〕五十音順

- 磯前順一, 2008. 考古学の文化領域論—土面の遺跡組成論をめぐって. *コンタクト・ゾーン* 2, 37-51.
- 勝浦康守, 1999. 南蔵本遺跡（住宅開発工事）. 徳島市教育委員会（編）, 徳島市埋蔵文化財発掘調査概要 9. 徳島市教育委員会, 徳島, pp.1-25.
- 河野雄次, 1998. 調査成果のまとめ. 徳島大学埋蔵文化財調査室（編）, 庄・蔵本遺跡 1. 徳島大学埋蔵文化財調査室, 徳島, pp.54-55.
- キージング（Keesing R. M.）, 1975. *Kin groups and social structure*. （小川正恭・笠原政治・河合利光訳, 1982. 親族集団と社会構造. 未来社, 東京）.
- 近藤玲, 2002. 徳島県の弥生時代における墓制について. 徳島考古学論集刊行会（編）, 論集 徳島の考古学. 徳島考古学論集刊行会, 徳島, pp.413-428.
- 近藤玲, 2017. 四国東部における灌漑水田農耕の受容期の年代について. *総研大文化科学研究* (13), 149-193.
- サーヴィス（Service E. R.）, 1971. *Primitive Social Organization: An Evolutionary Perspective*. （松園万亀雄訳, 1979. 未開の社会組織—進化論的考察—. 弘文堂, 東京）.
- 佐々木由香・バンダリ スダルシャン, 2015. 庄・蔵本遺跡第 27 次調査出土の炭化種実. *国立大学法人徳島大学埋蔵文化財調査室紀要* 1, 107-114.
- 新宅信久編, 2002. 江辻遺跡第 5 地点. 粕屋町教育委員会, 粕屋.
- 田中良之, 1986. 縄文土器と弥生土器 1. 西日本. 金関恕・佐原真（編）, 弥生文化の研究 3. 雄山閣出版, 東京, pp.115-125.
- 田中良之, 1998. 出自表示論批判. *日本考古学* 5, 1-18.
- 田中良之, 2000. 墓地から見た親族・家族. 都出比呂志・佐原真（編）, 古代史の論点 2. 小学館, 東京, pp.131-152.
- 徳島県・徳島県埋蔵文化財センター, 2021. 徳島県徳島市南蔵本遺跡現地説明会資料. 徳島県・徳島県埋蔵文化財セン

- ター, 徳島.
- 中村豊, 1998. 稲作のはじまりー吉野川下流域を中心にー. 東潮 (編), 川と人間ー吉野川流域史ー. 溪水社, 広島, pp.79-100.
- 中村豊, 2000. 阿波地域における弥生時代前期の土器編年. 田崎博之 (編), 突帯文と遠賀川. 土器持寄会論文集刊行会, 松山, pp.471-498.
- 中村豊, 2002. 縄文から弥生へー眉山北麓遺跡群の分析からー. 徳島考古学論集刊行会 (編), 論集徳島の考古学. 徳島考古学論集刊行会, 徳島, pp.245-258.
- 中村豊, 2009. 西病棟建設に伴う埋蔵文化財発掘調査の成果. 国立大学法人徳島大学埋蔵文化財調査室年報 1, 11-28.
- 中村豊, 2011. 吉野川流域における農耕文化の成立と展開. 徳島地方史研究会 (編), 生業から見る地域社会. 教育出版センター, 徳島, pp.9-39.
- 中村豊, 2018. 徳島・吉野川下流域における先史・古代の農耕について. 地方研究協議会 (編), 徳島発展の歴史的基盤ー「地力」と地域社会ー雄山閣, 東京, pp.125-145.
- 那須浩郎, 2017. 庄・蔵本遺跡第 20 次調査 SD312 から出土した炭化種実. 国立大学法人徳島大学埋蔵文化財調査室紀要 3, 97-100.
- 端野晋平, 2018a. 庄・蔵本遺跡一帯における弥生時代前期墓制の検討. 徳島大学埋蔵文化財調査室 (編), 庄・蔵本遺跡 3ーポイラータンク地点 (1998 年度立会)・第 22・30 次調査地点ー. 徳島大学埋蔵文化財調査報告第 7 卷. 国立大学法人徳島大学埋蔵文化財調査室, 徳島, pp.91-116.
- 端野晋平, 2018b. 初期稲作文化と渡来人. すいれん舎, 東京.
- 端野晋平・三阪一徳・脇山佳奈・山口雄治, 2015. 庄・蔵本遺跡第 27 次調査 (立体駐車場地点) の成果. 国立大学法人徳島大学埋蔵文化財調査室紀要 1, 43-97.
- 橋本達也, 2001. 弥生時代前期朝鮮系無文土器の展開と徳島. 青山考古 18, 167-176.
- 橋口達也編, 1987. 新町遺跡. 志摩町教育委員会, 志摩.
- 原俊一編, 1999. 田久松ヶ浦. 宗像市教育委員会, 宗像.
- 北條芳隆, 1998. 弥生時代前期集団墓の構造. 徳島大学埋蔵文化財調査室 (編), 庄・蔵本遺跡 1. 徳島大学埋蔵文化財調査室, 徳島, pp.133-141.
- 北條芳隆編, 1998. 庄・蔵本遺跡 1. 徳島大学埋蔵文化財調査室, 徳島.
- 松村道博編, 1996. 下月隈天神森遺跡Ⅲ. 福岡市教育委員会, 福岡.
- 三阪一徳, 2017. 庄・蔵本遺跡第 27 次調査出土の木製品. 国立大学法人徳島大学埋蔵文化財調査室紀要 3, 29-44
- 宮本一夫編, 2001. 佐賀県大友遺跡. 九州大学大学院人文科学研究院考古学研究室, 福岡.
- 米田恭子・佐々木由香, 2017. 庄・蔵本遺跡出土の土器付着炭化鱗茎の同定. 国立大学法人徳島大学埋蔵文化財調査室紀要 3, 79-88.
- 〔韓国語文〕カナダ順
- 慶南発展研究院歴史文化センター, 2009. 金海 栗下里遺跡 II. 咸安.
- 東亜細亜文化財研究院, 2012. 晋州 虎灘洞 先史遺跡. 昌原.

【付記】

本稿は、2021 年 7 月 11 日に開催された「2021 発掘とくしま調査報告会・講演会」(於：レキシルとくしま)での講演資料を加筆・修整したものである。